

二〇二三年二月二五日

決断の出来ぬ断捨離日短
東風強し船挫傷すといふニュー
雛飾る老ひたる月日思ひけり
春水の渦の虜や滯つくし
鳥枝にとまるや否や雪しずり
春眠し猫の欠伸を貰ひけり
いちまいの光となりぬ春の海
水禽の去りたる川の広さかな
兜煮の目玉から食む桜鯛

二〇二三年二月二四日

桜餅卒寿の女将立つ老舗
差しのべしおさな子の手にしたら梅
描く人の面差しに似し雛かな
まだ名無くおぼろげに鳴く仔牛かな
糸柳風の形に靡きけり
蹴ってみる石ころひとつ春うらら
春淡し茶筌に残るうすみどり

二〇二三年二月二三日

旅立ちの島を離るる春帽子
コロナ禍の中マスクして卒業す
けんかして壊してゆけり雪だるま
ゲーム中ドームの屋根をしづる雪
ジーパンに膝のぞかすも春ファッション
北窓を開く仏間の写し絵に
鰯焼くほどよき味噌の焦げ具合
庭草の萌ゆるかと見る雨水かな

二〇二三年二月二二日

春の波引つ張つてゆく小舟かな
肩の雪払うて酒場覗きけり
御膳屋の幟裂くやに東風強し
老気楽二度寝覚めても春眠し
帰る鴨水輪大きく飛び立てり

あひる きよえ もとこ 素秀 隆松 宏虎 ひのと みきお 千鶴 凡士 凡士 むべ やよい なつき みきお 明日香 せいじ 凡士 あひる ひのと こすもす 満天 みきお みきえ ふさこ ひのと ひのと ひのと 董つぎ なつき

六地藏囲みて淡き木の芽影
残照に鴨翔つ雫煌めけり
吾子を背にあやしなからや牡蠣割女

二〇二三年二月二一日

風花の乱舞アクセル緩めけり
水やりの私の影追ふ春の蝶
食卓に磯の香満ちて若布飯
上履きを雪の校舎へ届けけり
大見得の仁王の目玉春の塵
強東風に干鳥賊踊る島の波止
魚屋に鯛の鰻絵や風光る
男には負けぬ手足よ雪を掻く

二〇二三年二月二〇日

街灯の誘蛾灯めき春の雪
ふと気づく空の青さ梅白し
芽柳にもつれはじめし濠の風
海鳴りの磯に春告ぐ陣太鼓
田返しの畦に積まるる捨野菜
ひじき刈る波静かなる夜の磯
末黒野の焦げし香雨に匂ひけり
縁側は猫のまほろば山笑ふ
捨てられず母の形見の古雛
ようこそと笑む玄関の立雛
紙雛の直線の影柔らかし
薔薇の芽を絡ませ鉄扉閉ざしけり

二〇二三年二月一九日

八荒や舟子は太き權握る
ひと筆で表情変はる雛の目
まだ我の入る余地あり涅槃絵図
昼暗き常盤木の杜梅真白
春の雪一字点らぬネオンかな
綾なせる鯉に艶増す春の水

なつき 凡士 凡士 せつ子 智恵子 きよえ ひのと 素秀 凡士 なつき ひのと うつき あひる たか子 凡士 明日香 千鶴 千鶴 千鶴 ひのと せいじ ぼんこ せいじ みきお ひのと 素秀 満天 うつき せいじ 宏虎 明日香

毎日句会みゆる選・二〇二三年二月二七日